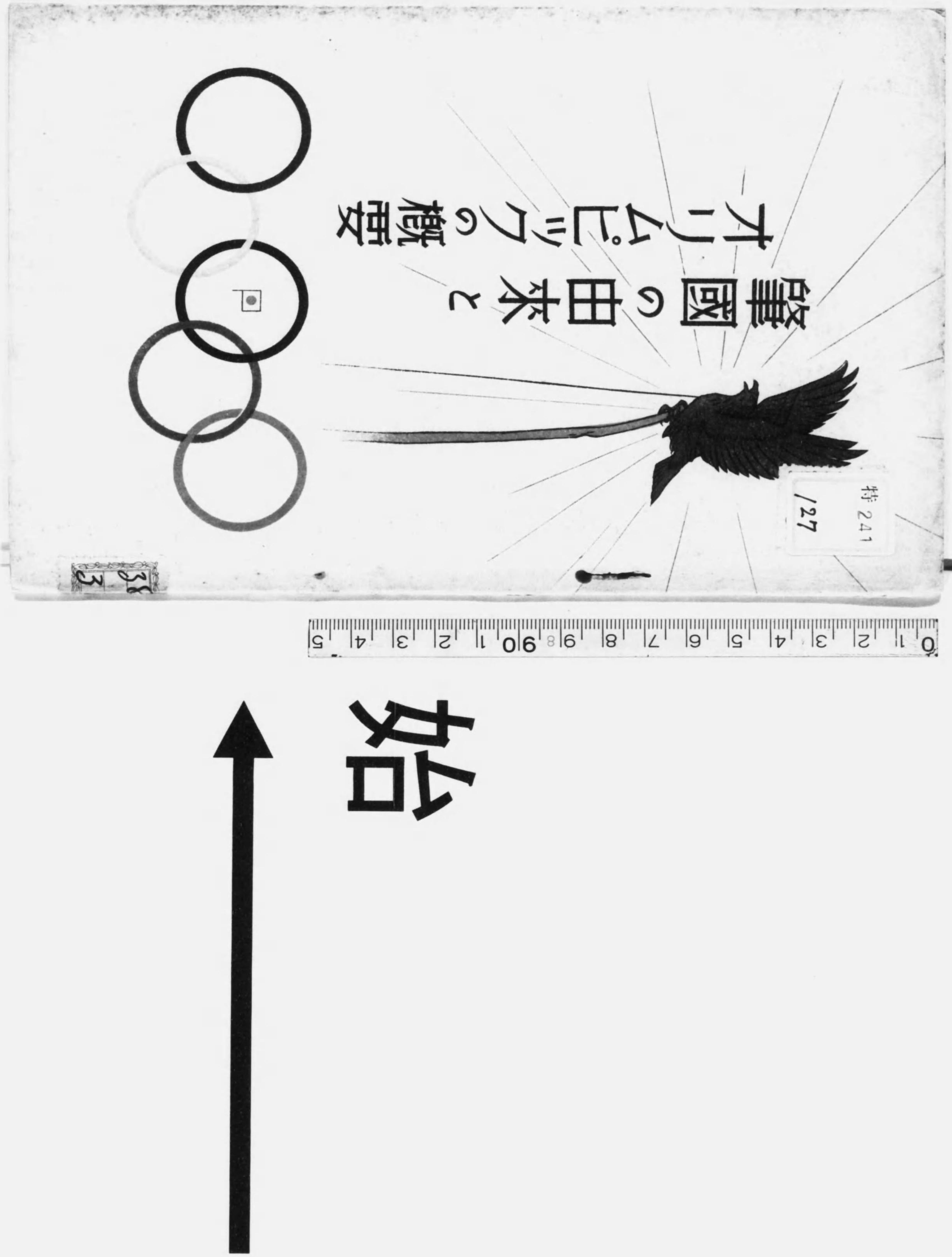


特241
/27

皇祖大靈鎭り在はす橿原神宮拜殿

肇國の由來

皇祖神武天皇國を肇め給ひしより皇統連綿として彌榮え、皇威年と高く國光日と輝き尚も止る所を知らぬ躍進日本が　畏くも今上陛下の御稜威の下、克く無自覺非反省なる國民政府の惰眠を醒まし、今や新しき東洋平和の確立を見るに至つたことは衷心より慶賀に堪えぬ所であります。

斯くて戰火全く收り平和の光遍かんとする昭和十五年に際して、世界に比なき皇國の悠久二千六百年を記念奉祝し、同時に御歷代の御聖恩に對し奉り拜謝の赤誠を致すべき一大奉祝會が、全國民感激の裡に擧行せらるゝことは欣快に堪えぬ次第であります。

而してこの曠古の盛儀を記念する爲め、東洋に未だ曾て前例なき萬國博覽會が帝都を中心として開催され、次いで又待望のオリムピック大會も擧行される事は錦上更に花を飾るべく、偏へに之れ聖恩の尊さ、神意の然らしむる所と感泣の外はないのであります。

されば彼の明治二十二年に擧行された憲法發布式以來の賑ひを呈して、東京市内は勿論

近郊一帶の地は全く人を以て埋め盡すの雜踏が展開され、盛儀史上曾て見ない新記錄を示す事は今より想像に餘りある所であります。

この空前絶後とも申すべき奉祝會の内容設備から、盛儀擧行の順序、餘興其他の詳細を記述すべきでありますが、未だ當局より發表を見ない爲め、玆には單に現在決定せる組織並に記念事業のみを略記するに止め、左に皇祖國を肇め給ひし大御業の概要を拜記して、いとも尊き御事蹟を偲ぶ事に致します。

紀元二千六百年奉祝會

一、組織

總裁　秩父宮雍仁親王殿下

副總裁　公爵　近衛文麿閣下

會長　公爵　德川家達閣下

一、奉祝費　金壹千萬圓

一、記念事業

(イ)橿原神宮境域並ニ畝傍山東北陵參道ノ擴張整備

(ロ)神武天皇聖蹟ノ調査保存顯彰

(ハ)御陵參拜道路ノ改良

(ニ)國史館ノ建設

(ホ)日本文化大觀ノ編纂出版

皇祖の大御業

皇祖神武天皇は御幼名を稚御毛沼尊と申上げ奉り、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の第四皇子に在せられ、御在位七十六年にして、崩御遊ばされました御方で、神武の御諡號は、後代に至りて御追贈申上げたのであります。

尊は御降誕ながらにして、御容相魁偉、四海を照徹し給ふ程の御氣高さを備へさせられ、宛然日輪の如くましましたので、御末の皇子であらせられたが、御父尊は「此子こそ、中國の

祖たるに適す」と宣はせられて、尊に御位を御譲りの後御昇天遊ばされたのであります。

御位を御繼承遊ばされた尊は、當時日向國高千穗宮に在せられ、御兄尊と共に御仁德を施し給ひましたので、筑紫一帶の地は全く皇化に服しましたけれども、東の地には未だ皇威が及ばぬため、御兄尊と御相談の上、天下平定、帝業恢弘の大計をお立て遊ばし遂に紀元前七年十月高千穗宮を御出發あらせられ東遷の首途に上らせられたのであります。即ち其際の詔に

昔我ガ　天神高皇產靈神　大日靈貴尊（天照大神）此ノ豐葦原瑞穗國ヲ擧ゲテ、我ガ天孫瓊々杵尊ニ授ケ給ヘリ。是ニ於テ　瓊々杵尊天關ヲ闢キ、雲路ヲ披ケ仙蹕ヲ駈リテ以テ戾止シ給フ。是時運鴻荒ニ屬シ、時草昧ニ鐘レリ。故ニ蒙ニシテ以テ正ヲ養ヒ此西偏ヲ治ム、皇祖皇考乃チ神乃チ聖ニシテ、慶ヲ積ミ、暉ヲ重ネ給ヒ、多ク年所ヲ歷タリ、而シテ遼邈ノ地猶未ダ皇澤ニ霑ハズ、遂ニ邑ニ君アリ村ニ長アラシメ、各々自ラ彊ヲ分チ以テ相凌轢ス。

鹽土ノ老翁ニ聞ク、曰ク東ニ美地アリ、青山四ニ周レリ。其ノ中ニ亦天ノ磐船ニ乘リテ飛ビ降レル者アリト、余謂フニ彼ノ地ハ必ズ以テ天業ヲ恢弘シ、天下ニ光宅スルニ足ルベシ、蓋シ六合ノ中心カ。厥ノ飛ビ降レル者ハ謂フニ是レ饒速日ナラン、何ゾ就テ都セザランヤ。

かくて高千穗宮を後に、皇兄三尊を始め奉り諸々の臣僚を率ひ、御船の準備を整へさせ給ひて、先づ最初に御着船遊ばされた所は、速吸門（今の佐賀縣）でありましたが、其地の漁人で珍彥と申す者が、海路の先導役を願ひ出でましたので、尊は之を水先案内として豐の國菟佐（今の大分縣）に御到着、それより安藝の地を經て吉備（今の岡山縣）に進ませられ、此地に宮殿（高島宮）を御造營あらせられて、駐らせ給ふ事三年、後再び海路御進航、旬日にして浪速（今の大阪府）に御上陸、それより大和路に入らせられんとして、膽駒山（今の生駒山）に差かゝらせ給ふや、鳥見の里に長髓彥と呼ぶ土賊が幡居して、皇化に服せざるのみか、皇帥の東進を阻止せんとし衆徒を率ひ頑强に反抗して、容易に降服致しませんので、尊は早くもこれは地の利を得ぬためと思召され、道を東南に選み轉向さるゝ事になりました。即ち其際の詔に

我ハ是レ日ノ神ノ子孫ナリ。而シテ日ニ向ヒテ膚ヲ征ツハ、此レ天ノ道ニ逆レリ。退キ還リテ弱ヲ示シ、神祇ヲ禮祭シテ日ノ神ノ威ヲ背負ヒ、影ノ隨ニ壓ヒ躡マム。如此則チ双ニ血ヌラズ虜必ラズ自ラ敗レナム。

かくて尊は御進路に就き左やせん右やと、深く御心を惱ませられた御時、忽ち東の空に赫躍たる靈光一閃、呀ッと驚き給ふ折しも、忽ち彼方の天空より一羽の金鵄舞ひ降つて惧るゝ樣子もなく、左手に持ち給ひし尊の御弓の上に止まりましたので、尊は奇異の感に打たれ暫く打眺めて居られましたが、件の金鵄は又忽ち弓を離れて上空に舞ひ上りました。この奇瑞を御覽ぜられた尊は、偖はこの金鵄こそ曾て日向に在りし時、鹽土の老翁が天の磐船に乗りて飛び降れる者ありと告げたのは此の事か、これぞ天神の御使ならんと悟らせ給ひ、金鵄の飛び行く方へ進み給ひしに、豈計らん其地は紀の國（今の和歌山縣）でありましたから、太く感じ給ひ、これは此地を經て目的とする大和に進めよとの神告ならんと思召され、日を背に負ひて進ませられつゝ道すがら土賊名草戸畔を平げられ、それより道を東岸に取らせらるゝ事になり、海路御船にて御進行の途中熊野灘に差しかゝらせられた時、俄かに暴風が起り逆卷く怒濤のために、御船が將に覆らんばかりに危くなりました。この在樣を御覽ぜられた皇兄稲飯尊、御毛入野尊は太く尊の御躬を御憂慮遊ばされ、何とかして海神の怒を和らげ、尊の御安泰を計らんと思召された末遂に、相携へて激浪の中に投ぜられ尊き御躬を海神へ捧げられました。それが爲に今まで流石に荒れに暴れて居つた風も凪ぎ、浪も治まり、やがて荒坂津（今の和歌山縣二木島）に御上陸遊ばされたのであります。然るにこの地に勢力を張つて居つた土賊敷戸畔や國見岳（今の奈良縣と三重縣の境に聳ゆ）の山麓を根據とする土賊八十梟帥等が、皇帥に反抗致しますため、これ等の土賊を悉く滅ぼされて、其地方一帶は殆んど平定したのであります。茲に於て尊は漸く御心を安んぜられ、當初の目的とされ給ふた大和に御進み遊ばす事になりましたが、彼の梟賊長髓彥を其まゝに捨て置く時は、如何なる禍を引き起すやも計り難いと思召され、再び討伐に向はせられましたが、長髓彥は依然頑強に反抗して、容易に降服致しませんので、尊の長兄五瀨尊は、密かに謀を饒速日命に御授になりました。仰せを承けられし命は八咫烏を使嗾して難なく長髓彥を滅ぼされましたが、

その際畏くも五瀬尊は、梟賊の流れ矢を受けさせられ、これが因となつて御薨去遊ばされた事は返す〳〵も恐れ多き極みであります。

さて獰猛な長髓彦が討滅ぼされた爲に、此地方一帶に散在して居つた多くの酋族共は、翕然として悉く尊に降服したのみか、日向の宮に在せられた時代より、皇帥に反抗的態度を續けて居つた、土蜘蛛と呼ぶ一黨の酋族も、到底敵し難きを悟り、鉾を逆樣にして降を乞ひましたから、遂に大和一帶の地は、茲に全く平定したのであります。

斯て尊は、豫て希望をかけられし橿原の地を、永住の都と御定めになりましたが即ち其際の詔に、

我レ東征ヨリ茲ニ六年ナリ、幸ニ天神ノ威ニ賴リテ兇徒就戮サレヌ、邊土未タ清マラズ餘妖尚ホ梗シト雖モ、中州之地復風塵無シ、誠ニ宜シク皇都ヲ恢廓メ、大壯ヲ規基ルヘシ、而ルヲ今運此ノ屯蒙ニ屬シ、民心朴素巢ニ棲ミ穴ニ住ムノ習俗惟レ常トナレリ夫レ大人ノ制ヲ立ツルヤ、義必ズ時ニ隨フ、苟クモ民ニ利アラバ何ソ聖造ニ妨ハム且當ニ山林ヲ披キ拂ヒ、宮室ヲ經營リテ、恭ミテ寶位ニ臨ミ以テ元元ヲ鎭ムヘシ。上ハ則チ乾靈國ヲ授ケ給マウ德ニ答ヘ、下ハ則チ皇孫ノ正ヲ養ヒタマヒシ心ヲ弘メム。然シテ後ニ六合ヲ兼ネテ以テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ヒテ宇ト爲ム。亦可カランヤ。夫レ畝傍山ノ東南橿原ノ地ヲ觀レバ、蓋シ國ノ奧區ナラン、之レニ治スベシ。

（之が神武天皇肇國の詔であります）

之より尊は、臣僚に命ぜられて宮殿を御造營あらせられ、事代主神の御女蹈鞴五十鈴媛命を迎へて正妃と定め給ひ、翌年春正月朔日（元年一月一日）新營の宮殿に於て御即位の大禮を御擧げ遊ばされ、正妃を立てゝ皇后と爲させられたのであります。

而うして御式典の次第は、曩に天照大神が、天孫瓊々杵尊に神勅を授け給ひし時の、御先例に則らせられ、橿原宮の御庭前に、天津眞榊の神籬を設らへて八神を祭り、天富命をして、天璽、御鏡、御劍を正殿に奉安せしめられ、可美眞手命をして矛楯を執りて儀衛を嚴に、又道臣命をして宮門を護衛せしめ給ひて、御準備萬端整はせられた後群臣を參賀せしめ給ひ、天種子命をして天神壽詞を奏せしめられたのであります。

この御即位式に參賀せし多くの人々は、一同恭しく合掌して異口同音に神日本磐餘彦

天皇の敬稱を奉りましたが、これが御在位中の御尊號となつたのであります。

斯て御即位の大禮を了らせられ、諸政悉く整備致しましたので、紀元四年二月甲申の吉日を以つて天祖天神をお祭りになる尊嚴な大儀を執り行はせられたのであります。即ち其際の詔に

我ガ皇祖ノ靈ヤ天ヨリ降鑒リテ、朕ガ躬ヲ光助ケタマヘリ、今諸ノ虜己ニ平ギ海内無事ナリ、以テ天神ヲ郊祀リテ用テ大孝ヲ申ブ可シ。

乃ち奇瑞のあつた鳥見の里を御選みになり、その山中に靈畤を設け給ふて、嚴かに祭典を御擧行遊ばされたのであります。

而うして紀元七十六年四月三日（陰曆三月十一日）實算百二十七にして崩御あらせ給ひましたので橿原宮の東北に當る聖域に御斂葬申上げたのであります。之れが即ち東北陵と申上げる御大廟であります。

以上拜記致しました如く、天皇は天祖天孫の宏謨を恢弘あらせられんが爲に、間關崎嶇に屈せず、荊棘を披き醜虜を平げ、具さに辛苦を嘗めさせられ、以て肇國の柱礎を確立あらせられた事は洵に感泣の極みでありまして、その大御業の餘りにも廣大無邊なるに今更ながら感激の念を新たにすると共に、悠久二千六百年の大古を偲び衷心より慶祝する次第であります。

オリムピア宮殿より聖火リレーのスタート

オリムピツクの概要

第十二回オリムピツク大會が一九四〇年即ち昭和十五年に吾が東京で開催されることは、それが我國民の待望久しきものであつたゞけに一入欣快に堪へないものであります。近代オリムピツク競技が創始されて以來回を重ぬること十一回、四十餘年を經たのでありますが、その間總べてヨーロッパとアメリカのみで行はれて來ました。此度始めてアジアにオリムピツクの聖火が齎されて、吾武士道にも比すべきオリムピツク精神が全世界に遍く楔機となることは洵に慶賀に堪へません。

我等日本人は此際特にオリムピツク精神の眞髄と組織の概要を理解し、之に我民族の獨自性を充分に織込ましめ、以て第十二回大會をして、東洋最初のものであることの特種意義を發揮せしめねばならぬと思ひます。

故に以下オリムピツク大會の組織や歴史等に就て一言申述べてみたいと思ふのであります。

一、組織

オリムピック大會は御存じの如く世界的行事であり、從つてその最も主要なる機關はI・O・C即ち國際オリムピック委員會と云ふものであつて、此委員會が總てのオリムピックに關する重大事案を審議決定するのであります。

この委員會は各國からその國の大小其他スポーツ發達の程度に應じて選ばれた一名乃至三名の委員に依つて構成されるのでありまして、我國では現在徳川、副島、嘉納三氏が國際オリムピック委員であります。此國際オリムピック委員會が次期大會の最も適當なる開催地を決定し、その結果當該市にその開催方を委囑することになつてゐます。委囑を受けた市では、その國内のスポーツ關係諸團體を以て、N・O・C即ち國内オリムピック組織委員會を作り、この會が一切の責任を負ふて開催の準備を爲し、各國の參加援助を求め、その遂行に努めるのであります。今回次期大會が東京と決定するや早速關係諸團體を糾合して第十二回オリムピック東京大會組織委員會を作り、之が主體となつて、目下その準備に晝夜兼行の努力を拂つてゐるのであります。

一、陣容

その陣容を一瞥すると次の通りであります。

會長	國際オリムピック委員	公爵	徳川家達
副會長	東京市長	小橋一太	
同	大日本體育協會會長	下村宏	

尚此外に組織委員として、各省次官、嘉納、副島兩國際オリムピック委員等約二十名が居ます。

一、施設

第十二回オリムピック東京大會組織委員會は以上の如き陣容を整へるや、直ちに豫算千五百萬圓を計上し最も日本的特色を發輝した計畫を樹て、目下左の如き豫定の下に着々工事を進めてゐます。併し事變その他の關係から將來多少の變更があるかも知れません。

1　陸上競技其他　主競技場（明治神宮外苑收容力八萬人）

2 水泳　駒澤の新設プール又は外苑プール
3 馬術　世田谷の馬事公苑及東京競馬場近郊
4 射撃　未定
5 ボート　戸田村コース
6 ヨット　横濱港
7 體操
8 球技　芝公園競技場又は室内競技場
9 フエンシング
10 ボクシング　文部省體育館又は其他の室内競技場
11 自轉車　芝浦（三萬人收容）
12 ハンドボール　主競技場其他

その他特に番外競技として我國とアメリカ及びフイリツピンのみで行はれてゐる野球や、日本の國技たる武道も考慮されて居ります。

又第五回冬季オリムピック札幌大會も之に先立ち大體二月三日から十四日まで十餘日間、スキーは札幌、スケートは芝浦で擧行される豫定であり、昭和十五年大會の盛況は今日から推して偲ばれるのであります。尚東京市では之に備へるため、道路の改修を始めてゐるし、又外國選手の爲めのオリムピック村も駒澤に決定いたしました。

以上の體育競技の外にオリムピック大會期間中（九月廿一日から十月六日までの十六日間）世界各國から出品する繪画、彫刻、文學、音樂、建築の五種目に亘る藝術作品を展示してその優劣を爭ふ藝術競技展は上野公園内の東京府美術館又は日比谷公會堂で開催されることになつてゐます。

一、起源

オリムピック競技は遙に遠く二千餘年前のギリシア時代にその淵源を發してゐる極めて由緒深いものであります。現代歐洲文明の母體たる古代ギリシア文明は、ホーマーを有する文學、プラトン・アリストテレスの代表する哲學は勿論、その他天文・數學・建築・彫刻等凡ゆる分野に於て驚異に値する程の發達を遂げてゐました。

此の絢爛たる文明の中にスポーツ競技も發達したのでありますが、オリムピック競技は一面又ギリシアの宗教に根ざすものであります。抑もギリシアの宗教は所謂多神教であつて、即ち祭神は一神教と異り、例へば火の神、水の神、風の神等幾柱の神樣が居たのであります。

面白いことには、此等の神々は人間と全く同じ相貌を具へてゐるだけでなく、又人間同樣の感情や慾望も有つてゐる結果、神の夫婦間の喧嘩や神同志の戰の起ることもありました。

有名な大詩人ホーマー Homer の手になるトロヤ Troja 戰史は此神々の情慾や戰爭を描いて餘す所なく、後代の興味を何時迄もそゝるものであります。又この神々は人間社會に比すべき神の社會を作り、神と人間との間の交際も自由に行はれて、人間の女が神の子を生むことも出來たのであります。唯人間と違ふ所は神は不老不死であり、人間以上の力を具へてゐるといふことだけでした。それで此時代の神を超人の意味で英雄と呼び歴史家は此の神々の時代を先史時代或は英雄時代と名付けるのであります。この神の

社會に於て人間の國王及び王族とも稱すべき神が男女十二柱あり、ギリシア人は之を十二のオリムピックの神と呼んでゐました。

之はギリシアの北境山脈中にオリムプ Olymp と云ふ約三千米の高山があつて（今日のエリムボス山 Elymbos）多くの日は大低雲に被はれてゐる所から、ギリシア人はこの山の頂を神聖な神の棲居と信じてゐたからであります。

この十二柱の神の最高支配者が所謂ゼウスの神 Zeus（之は天の意味で、後世カトリック教のデウス樣 Deus もこれから出て來たのであります）であつて、この神は總べての天に關する事を掌るのは勿論、「神及び人間の父」と考へられてゐたから、例へば各國の國王はゼウスの神の代理として人民を治めてゐると解されてゐたのであります。從つてゼウスの神に對するギリシア人の尊崇の念は至高至大なものであつた結果、ゼウスの神に對して感謝の念を捧げ、將來の祝福を祈願する國民祭は當時驚くべき盛況裡に行はれたのであります。この國民祭はオリムプ山麓、南ギリシアにあるオリムピア Olympia の野で四年に一度行はれて、之れにはギリシア全土から老若男女を問はず一齊に參加しま

した。

祭典は夏至の次に來る滿月の日から始まり五日間に亘つて行はれ、その前後を通じてケ月間は所謂神聖なる休戰期間と定められて、假令戰爭中でも戰を中止して此の祭典を擧國奉祝せねばならなかつたのであります。

當時のギリシアはアテネやスパルタ等の諸市から成る都市國家でありましたが、このオリムピアの祭の際に各都市の代表選手が集まり、種々の競技に於て覇を競ふたのであります。之れが抑々のオリムピックの起源であります。この競技に參加し得る選手に必要な資格は「品行方正で模範的青年である」ことであつて、此精神から現今の國際オリムピック規定の中に「アマチユアー（職業選手に非ざる素人）たるを要す」といふことが含まれてゐるのであります。競技の優勝者に對しては殆んど物質的賞品はなく名譽を讃へるものとしてオリムピアの野に野生してゐた橄欖樹（別名月桂樹）の小枝が與へられたのであります。勝利者は自分の帽子又は冠に之を挿して、意氣揚々と自國に凱旋しました。

これから現代の月桂冠と云ふ語が勝利を表象するものとして生れて來たのであります。

尙優勝選手を出した故郷での歡待振りは今日から想像も出來ぬ位で、例へば物質を蔑視したスパルタなどでは、物を贈る代りに終身如何なる場合でも常に國王の次席を占める特權が與へられた程であります。このオリムピックの第一回は西紀前七百六十七年であつて爾後四年に一度引續いて行はれたのであります。現代のギリシア國は古代ギリシアの此故事を採つて紀元とし、此年から年號を記してゐるのであります。

以上がオリムピックの由來ですが今一つマラソンの起源に就いて傳へられてゐる所を述べて見たいと思ひます。

西紀前四百九十年、ギリシアのアテネと西アジアのペルシア（今日のイラン王國）の間にペルシア戰爭と云ふのが起りました。ペルシア國王ダリオス一世 Darios I は大軍を率ひてギリシアのアツテイカ Attica 半島に上陸し、マラソン Marathon と云ふ地に陣を布き、アテネをその背後から襲はんとしました。アテネの名將ミルテイアデス Miltiades

はペルシアの戰法の裏をかき、中央は薄く兩翼をうんと强化してペル・シアの大軍を擊破し、名聲を博したのであります。

アテネ市民は此戰爭の結果に就いて非常に心配し、全市民市場に集まつて戰況の報告を待つてゐました。そこへアテネの飛脚でフイディッピイデス Phidippides といふ者がマラソンから馳け來つて息を切らし乍ら「我軍は大勝、喜び……」と云ひ終らず倒れました。このアテネとマラソン間の距離が二十五哩餘あつたので、以上の故事から近代オリムピック大會が創立されるに際して、二十六哩の長距離競走を採用し之をマラソンと呼ぶやうになつたのであります。

一、近代オリムピックの歷史

斯くの如き古き由來と崇高なる精神を有する古代オリムピック競技は、ギリシアの衰亡と運命を同じくして、歐洲中世の所謂暗黑時代と呼ばれる長い間の鬪爭、不統一の暗雲の中に全く葬り去られてゐたのでありました。十八世紀に至り初めて歐洲諸國の秩序が回復し平和が到來するや、古代ギリシア文明に對する研究熱の熾烈と共に、その象徵

たるオリムピックの復興が叫ばれるに至つたのであります。

フランスのピエール・ド・クーベルタン男爵はその全生涯と全財產を捧げて之が再建のために盡瘁され、その盡力に依つて一八九六年初めて第一回がギリシヤのアテネで開催されたのであります。されば世人は此人を以て近代オリムピックの創始者と稱へ、尊敬と感謝の念を捧げたのでありますが、昨十二年九月二日全世界人の哀悼裡にジュネーブで逝去されました。

斯くして近代オリムピックはこの第一回以來四年目毎に歐米各大都市で開催され、年と共に益々盛大になつて來たのであります。

只一九一六年の第六回ベルリン大會のみは世界大戰の結果中止されましたが、この度の東京大會を以て第十二回を數へるのであります。我國がこのオリムピックに參加したのは一九一二年の第五回ストツク・ホルム大會からであつて、此時、金栗、三島兩氏がマラソンに活躍し、日東男兒の意氣を吐いたことは、我等の今尙記憶する處であります。近く一九二八年第九回アムステルダム大會では、我が人見絹枝孃が幾つもの世界記錄を

作り、又織田選手の三段飛に於ける優勝に依つて、男子陸上競技界最初の日章旗をメエーン・マスト高く掲げることが出來、次の一九三二年第十回ロス・アンゼルス大會では我が無敵水上軍の初制覇が完成されたのであります。又前回の第十一回ベルリン大會では金選手のマラソン制覇の外、あの河西アナウンサーの感激の實況放送「皆樣、スキッチを切らないで下さい。今我が前畑孃と獨逸のゲレンゲル孃が猛烈な接戰を演じてゐます。殆んど同列です。ア、前畑、一かきリードしました。後二十米、十米、五米、前畑頑張れ、〳〵〳〵〳〵」は未だに我等の耳に殘り、眼前に髣髴たるを覺えるのであります。

而して昭和十五年即ち西紀一九四〇年に、第十二回大會が我が東京で宛かも肇國二千六百年を祝福するかの如く開催されることは、寔に慶賀に堪へない所であります。

一、オリムピックの精神及び意義

オリムピックは以上起源及び歴史の項で見られる如く、實に古代ギリシア精神の最も善美なる表現であり發露であります。從つて第一にそこに天の神なるゼウスに對する敬

虔な信仰の精神が看取せられるのであります。即ち我等人間の無力、知識の有限性を自覺する處に無限なるもの、萬能なるゼウスに對する深き畏敬の念が生じ、その結果我等をして今日あらしむるは偏へに之れ神の恩寵なりとの感謝と、將來の幸福を祈る心が生れるのであります。この宗教心は單に古代ギリシア人に限らず、凡ゆる人種に共通なものであると思はれますが、特にオリムピック精神の第一のものとして、我々は之を看過すべきではありません。何故なればオリムピック大會の開催がそれに依つて開始される「聖火リレー」は今日に於ても最も嚴肅なるものとして遵奉されてゐるからであります。即ちギリシアにあるゼウスの宮殿の燈火を炬火に移して、開催地に向ひ出發した人は、心身共に齋戒して次の人に傳へ、その間絶對にこの聖火を消すことなく開催地に齎すといふ儀式であります。此度の東京大會では場所の關係上、實行方法に就ては未だ不明ですが、從來の大會では必ず守られたものでありました。これは説明を要する迄もなく、全智全能なる神の恩寵が全人類に遍ねくやうにとの古代ギリシア人の而して亦現代人の希求であり、信仰心の發露に外ならないのであります。

第二は全世界の平和と平等を求め、全人類の親善と友情の促進を圖る精神であります。地球上に生存する全人種が、その毛色の相異があるにもせよ、齊しく之れ人間であり、何れも皆神の子として、醜くき爭鬪を止め、親しく手を握らねばならぬことは、國境を超越した神の精神であり、オリムピックの核心をなすものであります。

「五輪のマーク」こそ實にこの精神の表現であつて、五といふ數は即ち歐洲、アフリカ、アジヤ、濠洲及びアメリカの五大陸を示すものであり、五色の彩は白、黃、黑の全人種とラテン・ゲルマン・スラブ・日本等の全民族を現はし、而して之等五大洲の全人種が圓滿に平和に手を繫いで行くことを意味するのが、五つの輪環の交錯であります。此の平和と親善に對する要求は啻に世界人としての立場に於て要請される理性の命令に止らず、實に古代オリムピック精神、即ち一ヶ月の祭典期間を神聖なる休戰期間とした事實が立證する古代ギリシアの宗教心でもあるのであります。

その他競技に當つてはフエヤープレー即ち公正なる態度が要求せられることは、選手は必ずアマチユアーでなければならぬとの規定から生ずる當然の歸結であり、更にオリムピックが啻に肉體力の競爭、體位の向上のみを目的とするものでなく、同時に精神力の優劣をも競はしめんとすることは、この期間中行はれる藝術競技展覽會に依つて理解せられるのであります。

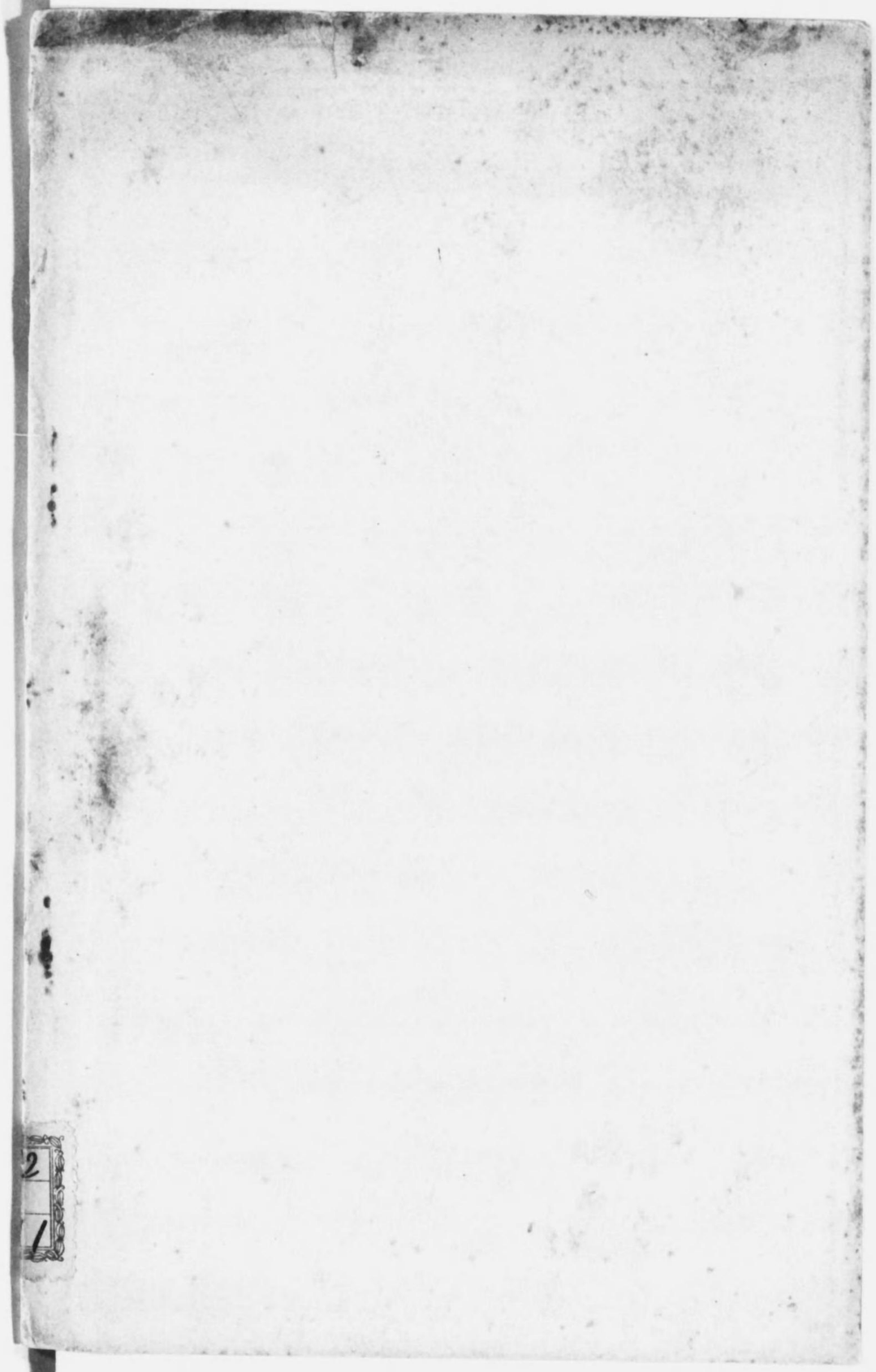
斯くの如きオリムピック精神は畢竟又我が日本精神や武士道とも一致するものであります。今や新東洋平和を確立する爲めの聖戰を遂行した我が日本が肇國二千六百年のこよなき年に、十二柱のオリムピック諸神を祭ることに起源するオリムピック競技の第十二回を、東京に於て擧行することは何といふ因緣でせう。從來五輪のマークの兩端即ち歐洲とアメリカのみで行はれたオリムピックを、始めて中央の輪たるアジヤに招致し、人類愛の權化たるオリムピックの聖火が全地球に遍く端緒をなす東京大會をして、日本民族獨自の方法に於て完成せしめることは、我等日本人の最大の責務であつて、且つ此大會の成功に依つて始めて、我國民が武力のみに止らず平和と文明への寄與貢獻に於ても、眞に秀でたる能力を有することを如實に立證することが出來、明朗新日本の眞面目を發輝し得る所以であると確信するものであります。

昭和十三年四月一日印刷
昭和十三年四月二日發行

編輯兼發行人　東京市世田谷區羽根木町一六九五番地　横山三郎

印刷人　東京市京橋區築地二丁目八番地　岩尾篤一

發行所　東京市神田區錦町三丁目十三番地　紀元二千六百年帝都觀光會

非賣品

終